

幼稚園実習における看護学生の学習経験の検討

学習内容の特性と小児看護学実習における意義

永田 真弓¹⁾，宮里 邦子¹⁾，川上 晶子²⁾，梶原 京子²⁾，田中 義人¹⁾

キーワード (Key words) : 1. 子ども観 (students' view of children) 2. 観察 (observation)
3. コミュニケーション (communication)

小児看護学実習における学生の学習経験を明らかにすることを目的として、研究を行った。H大学の小児看護学実習を経験した学生117名を対象に、まとめのカンファレンス・ノート記録2年分を資料とし、KJ法を用いて分析した。本稿では、幼稚園実習に焦点を当て報告する。

1. 幼稚園実習における学生の学習経験は、【自分の力を生かしている子どものありようの理解】【子どもの現実に身を置く言動や態度の習得】の2つのカテゴリーから構成されていた。
2. 【自分の力を生かしている子どものありようの理解】【子どもの現実に身を置く言動や態度の習得】の2つのカテゴリー間には、相反する内容と共通する内容が存在していた。共通する内容としては遊びがあり、全体としては、相互に作用していた。
3. 幼稚園実習の意義として、子どもの主体性や生き生きしさに対応する大人の役割認識と遊びの認識、そして、子どもに学ぶ人との関わりの豊かさへの実感が示唆された。
4. 教育への示唆として、小児看護に重要な子どものトータルケアに繋がる実践的な子ども観の涵養、観察やコミュニケーション技術の基盤となる見ること、聞くことの体験という基礎教育における幼稚園実習の役割の一旦を知ることができた。

はじめに

H大学（以下本学）の小児看護学実習では、幼稚園と小児科病棟での2施設の実習を終えた段階で、学生主体の最終カンファレンスを行っている。この最終カンファレンスにおける学生の発言内容には、レポートには記述されない幼稚園児と入院中の子ども、あるいは保育者と看護者といった幼稚園と病棟との突き合わせがある。そして、生き生きとした学習経験には、幼稚園実習の重要性を感じさせられる。

一方、小児看護学の実習施設として入院病棟に加え、保育園や幼稚園を取り入れている教育機関は多い¹⁾。しかし、保育園実習や幼稚園実習に関する報告は少なく²⁾、学生自身の捉えた学習経験や実習の意義は十分に明らかにされていない。本稿では、最終カンファレンスノートを活用し、小児看護学実習の中でも幼稚園実習における学生の学習経験を対象論的に明らかにすることを目的として、学生自身が幼稚園実習において経験し、学び取った内容の特性とその意義を検討する。

実習の概要

1. 実習期間および実習施設

3年次の9月～12月と4年次の5月～7月に1グループ3週間で、G幼稚園実習を1週間、H大学病院小児科病棟を2週間で実施する。1グループの人数は5名～7名である。

G幼稚園の教育方針³⁾は、次の通りである。1) 子ども自らの活動や遊びを中心にして注意力、興味、意欲をやしなう。2) 生活のきまりを子どもと一緒に考え、話しあって守れるようにする。3) 子どもが気づき求めた経験を積極的に出来るようにする。4) 保育者は子どもと共に一人ひとりの成長をよるこび、認める。5) 保育者は、子どもの自主的な活動をうながす手助けをする。また、園児の1日の流れを表1に示す。

2. 幼稚園実習の課題と経験内容

実習課題は、次の3点である。1) 集団における健康な幼児の日常生活を知る。2) 集団生活場面を通じて幼児の成長・発達を知る。3) 幼児の成長・発達を助けるための大人の役割を知る。

・ Nursing students' learning experiences of pediatric nursing practice in kindergarten
- learning contents' trait and significance of the context of fundamental education-

・ 所属：1) 広島大学医学部保健学科看護学専攻 2) 広島大学大学院医学系研究科保健学専攻
・ 広島大学保健学ジャーナル Vol. 2(1) : 64~71, 2002

表1. 園児の一日の流れ

| 午前 | |
|-----------|--|
| 登園 | |
| 自主的活動 | 室内; 箱製作、粘土、絵画、積木、パズル、ごっこなど 屋外; 固定遊具、砂場、水あそび、野球、サッカー なわとび、おにごっこなど |
| 片づけ | |
| 集まり | 礼拝、話し合い、絵本、ゲーム、うた、表現あそびなど |
| 昼食またはおやつ | |
| 午後 | |
| 自主的活動(同上) | |
| 片づけ | |
| 集まり(同上) | |
| 降園 | |

主な経験内容は、3歳児クラス、4歳児クラス、5歳児クラスのいずれかに学生が1名ずつ入り、クラス担当の幼稚園教諭(以下:先生)の指導のもと、子どもとの関わりを持つことである。実際の通園は、3日間ないし4日間で、幼稚園実習最終日には先生同席の反省会を実施している。

3. 最終カンファレンス

小児看護学実習を通しての学びや感想、自己評価などについて学生の運営で自由に話し、振り返る。特にまとめることはしない。教員1名~2名とH大学病院小児科病棟婦長1名が同席するが、学生からの質問に応じる、発言内容を確認する以外は学生の話合いが中心である。討議時間は1時間、1グループまたは2グループで実施する。

研究方法

1. 対象者

対象は、1997年5月~1998年12月の期間に、本学の小児看護学実習を経験した学生117名である。同意を得るにあたり教員が、最終カンファレンス終了後の学生に研究要旨の説明と研究参加を依頼し、口頭で協力と承諾を確認した。研究参加に対する配慮は次の通りである。1) 研究への承諾は、学生の自発的な意志によって同意を得るものである。2) 学生が承諾を拒否したために、何らの不利益も生じないことを保障する。3) 得られたデータは匿名であり、カード化されるので個人的な情報としての結果は出ないこと、また、研究以外の目的では使用しない。4) 承諾後においても研究に対する質問や研究参加の取り消しができる。

2. 調査方法

資料として、最終カンファレンス・ノート記録2年分を用いた。最終カンファレンス・ノート記録は、書記担当の学生がカンファレンス中に書き留めたものである。また、この記録は文章だけでなく、単語や略語、記号によっても表現され、カンファレンス中の学生の発言全てをそのまま記載しているとはいえないが、発言内容には近い記述である。

3. 分析方法

データ分析にはKJ法を用いた。KJ法は、何らかの先入観やできあいの仮説や理論、あるいは希望的観測に合わせたものではなく、渾沌それ自体に語らせて渾沌から秩序を創り、多様性を持つ現象に存在する主要要素や出来事とその概念間の関連を明らかにして、データに根ざした新たな発想や見解へと展開することを目的としている⁴⁾⁵⁾⁶⁾。最終カンファレンスでの学生の発言は、実習における学生自身の経験に基づいた一回的、個性的、複合的な性格を持っている。そこで、学生一人ひとりのユニークな学習経験を見過ごすことなくその学習経験の関連を構造的にも理解し、学生の体験や学習内容が持つ看護教育における意味を発見するにはKJ法が有効であると考えた。

分析は、1997年5月~1998年12月までの実習が全て終了した後に次の手順で行った。最終カンファレンス・ノートから対象学生が発言した部分の記録を抽出し、意味上の文節に区切ってラベルに転記した。発言内容から幼稚園実習の学習経験、病棟実習の学習経験、学生自身の学習経験に分類して、3種類の学習経験を類別毎に分析した。ここでいう学習経験とは、学習者の経験を通して行われ、学生が置かれている環境に向かってなす反応とした。意味内容の類似性によってラベルを集め、その集合したラベルの本質が明らかになるまで内容を読み返し統合するという一連の作業を繰り返した。次に、導き出されたカテゴリー、サブカテゴリーを意味上の相互関係性により空間配置し、関係を線で結びつけ図解した。文章化の第1段階としてカテゴリー毎に学習経験を説明した。第2段階として図解を基盤に学習経験を検討した。また、意味内容に疑問が生じたときには最終カンファレンス・ノート記録に戻る、あるいは病棟実習中の毎日のカンファレンス・ノート、実習後のレポートと照合して内容を検討した。分析の全過程は、小児・母子看護領域の臨床経験や看護教諭経験およびセルフヘルプ・グループ支援経験のある研究者4名(実習担当教員2名を含む)で行い、スーパーバイザーから指導を受けた。カテゴリー化の段階では、研究者4名が個別に行ったものを合わせて不一致の部分を検討した。文章化・図解化では、研究者間の判断と解釈が一致を得るまで突き合せを行っ

た．最終的に，明らかになったカテゴリー名や研究結果が時を隔ても同一であることを確認した．

結 果

1．対象者数

対象者は，女子学生114名，男子学生3名，計117名であった．

2．小児看護学実習における学習経験

最終カンファレンス・ノート記録から944枚のラベルが抽出された．幼稚園実習の学習経験（総ラベル数：319枚），病棟実習の学習経験（総ラベル数：427枚），学生自身の学習経験（総ラベル数：198枚）に分類された．以下，幼稚園実習に関する分析結果を述べる．

3．幼稚園実習の学習経験

幼稚園実習の学習経験は，5サブカテゴリー，2カテゴリーに統合された（図1）．以下，カテゴリー：【】，サブカテゴリー：《》，サブカテゴリーの1段階前のカテゴリー：　で示す．【自分の力を生かしている子どものありようの理解】は，《自分なりの基準を持っている》《自分で成長・発達している》《遊びに支えられている》から構成され，【子どもの現実に身を置く言動や態度の習得】は，《ありのままを受け止める》《体験を共にする》から構成されていた．データの中から象徴的事項を引用し，各カテゴリーについて文章化した．

- 1) 自分の力を生かしている子どものありようの理解
 学生は，子どもが自分の欲求を満たすことにストレー

トで，幼稚園でのコンサートを“つまらない”とはっきり言うなど 思うがままの気持ちや欲求を表出することを知った．しかし，子どもは 思うがままの気持ちや欲求を表出する 一方で 家と幼稚園を分けている こともあった．また学生は，“この人はどうなんだろう”と様子を見られていたこと，情緒障害のある子どもに“放っておいてくれ”と言われたが普通に接していたら甘えられたこと，乱暴した子を無視すると次の日からはしなくなったことなどの体験から，子どもが 大人の人間性を感じ取る と考えていた．そして，子どもだからこそ信頼関係が大切であり，子どもに信頼してもらえないと関係がづくりにくいと感じ，子どもが《自分なりの基準を持っている》と理解していた．

学生は，兄がいる女の子は男の子遊びが多く，人が手本を見せていると自然とそうなるなど子どもが周りの影響を受けて成長し，人の態度をまねる ことを実感していた．また，学生が思う以上に子どもにとって“ごめんね”の一言が大きいことを知ったとき，ゲームのルールは大人が説明するより子どもがする方が分かることに気付いて，子どもだけに分かりあえる世界があると思った．子どもたちが自我のぶつかり合いからけんかの法則や人の痛みを知り，母親がいない環境にある幼稚園では子ども同士刺激し合うなど，独自の世界の中で関わり合いながら学ぶ ことを理解していた．

学生は，それぞれの年代の世界があると考え，3歳児は自分以外の世界を拡げようとしている，4歳児は社会性が発達しつつある，5歳児は大人の基準に近い自分たちの社会をつくっていると捉えていた．また，同年代でも早生まれと遅生まれでは大きな差があることを知り，子どもは 日々変化している と思った．しっかり自己主張する，1つ聞いても10答える，学生が疲れる程遊ぶと，子どもの発想の豊かさや好奇心の強さ，興味を引いたものに対するエネルギーの濃さを感じていた．学生は，種のように可能性やエネルギーを秘めている ありように子ども本来の姿を見て，子どもは《自分で成長・発達している》と考えていた．

学生は，遊びの中で子どもが身体を使うこと，泥など自然と触れ合うこと，そして遊びで家庭が伝わることを知った．また，遊びイコール気晴らしや娯楽と思いがちな大人との違いを感じて，子どもでは遊びそのものが生活であって食事以外のすべてが遊びであり，子どもが 遊びと一体化している と考えていた．学生は，遊びを自由に選び発展させたり，子ども同士で楽しそうにしているのを見て，遊びを通して満足し生き生きする子どもは 遊びで充実し，《遊びに支えられている》と理解していた．

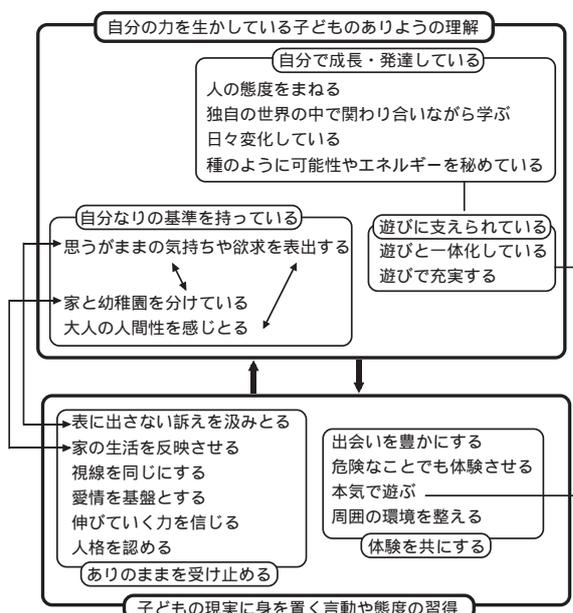


図1 幼稚園実習における学習経験の統合結果

2) 子どもの現実に身を置く言動や態度の習得

学生は、“だめ”という言葉が子どもに受け入れられないことを様々な場面で体験していた。そこで、子どもを叱るときの先生の対応に注目して、先生がまず理由を聞き言動を認めた後“～してはいけない”“～したらいいよ”と言っているのを観察した。頭ごなしに叱らない方針が幼稚園全体の雰囲気繋がっていることに気付いた。子どもはおもちゃを壊されたとき、壊された気持ちを分かって欲しいという心境にあること、自分をしっかり持っている子どもは問題児ではなく、自己主張して自分を貫く子どもであると学生は理解していた。そして、自己主張の強い子どもや集団の中に入れられない子どもでも、その個性や価値観、意志を含めて認めることが 人格を認める ことであると学んでいた。大人の役目は、人格を認めた 上で方向づけることであると考えていた。学生は、情緒障害のある子どもに対して問題扱いしていた保護者や子どもたちが、幼稚園の教育方針によりその子どもを受け入れ理解した過程を知って感動した。その教育方針のもと、一貫して子どもを見守る姿勢や子どもを長い目で見て自信が持てるようにする先生の関わり方に、伸びていく力を信じる ことを学んでいた。子どもの日課に合わず、子どもの気持ちになるなど、実際に 視線を同じにする ことを体験していた。また、幼児と同じレベルまで下げるのかと思っていたことや子どもだからと決めつけている自分を発見したことによって 視線を同じにする ことを体得していた。

学生は、子どもは、親に愛情を受けて十分に甘えていると余裕があること、情緒が安定していることに気付き、親から十分愛情を受けると心が広がると考えていた。大人から見て“いい子”は本当は家にいるときはわがままで欲求を満たしているとも感じていた。そして、言葉によるコミュニケーションや身体的な接触も愛情表現として重要で、子どもによっては叱ることも相手にされていると感じることを知り、愛情を基盤とする ことがいかに大切かを理解していた。子どもに接していると家の生活がよく見えること、先生がそこうまく働きかけていることを知り、家の生活を反映させる 関わりが要ることも学んでいた。学生に近寄ってくる子どもは友達がいないが、寄ってこない子どもでは友達がいて子ども同士で遊んでいること、乱暴な子どもは言葉が足りないので態度で出ることなどを洞察していた。そして、大人に甘えたい、みんなに構って欲しいという子どもの 表に出さない訴えを汲みとる ことが大切であり、自分を貫く子ども、表現の下手な子どもなど、多様な子どもの《ありのままを受け止める》言動や態度を学んでいた。

学生は、子どもが新たな人と会うことで違う面が発

揮され、話し方ひとつでも刺激を受けることを知り、出会いを豊かにする ことが求められていると感じていた。幼い子どもが鋸を使っていたことの驚きをきっかけに、先生が危険を予測したり、安全に気を配る役目を担っていることに気付き、危ないものに触れさせないのではなく、危険なことでも体験させる ことの重要性に気付いていた。

また、楽しませることで自然と子どもたちが従っていくのを見て、先生は遊びの専門家であると思った。実習中、学生は夢中になって遊びに加わったとき、子どもがたくさん集まってきた状況をふり返り、子どもと遊ぶときは“遊んであげる”ではなく、大人も楽しむことの大切さを知った。大人が遊びを工夫すると子どもがそれを発展させていくことにも 本気で遊ぶ 関わり方を学んでいた。学生は、環境によって遊びが変わる、発想が豊かになるなど少しの工夫でも子どもには大きな影響があることを知り、周囲の環境を整える ことを土台に子どもと《体験を共にする》言動や態度を体得していた。

考 察

学生自身が幼稚園実習の中で経験し、学び取った内容の特性とその意義、また、基礎教育における幼稚園実習の役割の2側面から学習経験を検討する。

1. 学習経験の特性から見た意義

1) 子どもの主体性や生き生きしさに対応する大人の役割と遊びの認識

学習経験全体を構造的に見ると、図1の【自分の力を生かしている子どものありようの理解】と【子どもの現実に身を置く言動や態度の習得】の関係性に示す通り、幼稚園実習を通して子どものありようと大人の言動や態度との相互作用を理解していたことが分かる。学生は、子どもが 大人の人間性を感じとる ほどの洞察力や感受性を持ち、独自の視点で物事を見てそれに従って行動することを知ると同時に、子ども自身に内包されている未来性やそのエネルギーを「種みたい」と実感していた。【自分の力を生かしている子どものありようの理解】には、伸び伸びとした子どもの姿が想像できる。また学生は、【自分の力を生かしている子どものありようの理解】に見られる自由で活発で、主体的な子どもに対応する大人のあり方を学んでいた。なかでも、【子どもの現実に身を置く言動や態度の習得】の基盤となる 愛情を基盤とする 伸びていく力を信じる 人格を認める 周囲の環境を整える の学習経験は、子どもに対する基本的で普遍的な関わり方や大人の役割の再確認である。それはま

た、子どもを一人の人として尊重し、愛情を持って接するG幼稚園の先生の姿勢と『のびやかに活動できる環境の中で子ども自ら育つ』⁷⁾という幼稚園の教育方針に共感し、その実践に近づこうとしていたともいえる。学生は、子どもが手厚く庇護されるよりも一人の人として認められ、その成長を信じて個々の成長・発達に応じて対応されるという環境整備を中心とした働きかけによって、子ども自身が備えている力を発揮させ、伸び伸び育つことを学んでいたと考える。

【自分の力を生かしている子どものありようの理解】と【子どもの現実にも身を置く言動や態度の習得】の双方に示されている遊びに対する認識にも注目できる。特に、【自分の力を生かしている子どものありようの理解】に遊びが含まれていることは、本学学生のユニークな学習経験といえる。学生は、「遊びそのものが生活である」と遊びが子どもの生活の中に密着していること、「遊びの中で社会のルールを学ぶ」など子どもの発達段階において遊びは不可欠な活動であることを学び、子どもが遊びによって身体や情緒、知的な活動を満足させ、生き生きしていくことを理解していた。《自分で成長・発達する》子どもが《遊びに支えられている》という構図は、幼児期の子どもにとって欠かすことのできない遊びについての学びであったことが推察できる。また、学生は、子どもにとって重要な遊びに関わる大人の姿勢として、「遊んであげる」という援助としての態度ではなく、子どもと対等の立場になり、真剣に遊ぶことの重大さに気付いていた。本気で遊ぶには、子どもと遊ぶ学生が、互いに友として生き生きとした関わりを展開している様子が想像される。倉橋⁸⁾は、子どもの友となるに一番必要なのはいきいきしさであると述べている。学生は、子どもと本気で遊ぶ中からも遊びの本質である自発性、自由性、創造性を見出し、子どもの心の世界を知ることができた⁹⁾と推察する。

2) 子どもに学ぶ人との関わりにおける豊かさの実感

次は、学習経験の構造として特異的な《自分なりの基準を持っている》と《ありのままを受けとめる》の2つの学習経験の結びつきに着目する。これらは家と幼稚園を分けている子どもが居る一方で、その子らしく幼稚園生活を過ごすためには家の生活を反映させた関わりが求められていると気付いたことや、思うがままの気持ちや欲求を表出する子どもが多い中で、みんなと遊びたいや大人に甘えたいという欲求をストレートに出さない子どもに対しては、表に出さない訴えを汲みとることが大切であるなど、相反する子どものありようとその関わり方の学びである。学生の相反する学習経験には、視線を同じにすることを中心とした子どもに対する共感的・多角的

な見方やアプローチの体得と、子ども一人ひとりの特徴や子どもの持つ多面性を認めることの学びが窺える。また、子どもの好奇心や想像力に接して、新鮮な発見や感性の豊かさに刺激を受けて感動していた学生の柔軟な発想と子どもに対するあたたかい眼差しが感じられる。

子どもに学ぶ姿勢は、【子どもの現実にも身を置く言動や態度の習得】のもう一つの柱となる子どもと《体験を共にする》ことにも窺える。暉峻¹⁰⁾は、人間は能動的になんかにかに働きかけ、仕事をしているときも、得るものがある。しかし、受身で自分をカラにして受け取ることもまた豊かであると述べている。【子どもの現実にも身を置く言動や態度の習得】は、学生あるいは大人の価値観で見ているだけでは得られない、今ある子どもの現実の中に入ってこそ得られることの学びである。学生は、成長過程において子どもと触れ合う機会が少ない世代である¹¹⁾¹²⁾。幼稚園実習での枠にはまらない子どもとの出会いは、驚きや戸惑いの連続であったことが容易に考えられる。しかし学生は、子どもの《ありのままを受けとめる》ためのプロセスや子どもと《体験を共にする》ことを通して、自分自身のありようを見つめて人として成長しようとしていた。学生は、幼稚園実習で出会った子どもから、人と人との補完し合う関係性やその関わり方の豊かさを実感していたことが分かる。

2. 教育への示唆

1) 子どもとのトータルケアに繋がる実践的な子ども観の涵養

学習経験全体から、学生が子どもの成長・発達とそこに関わる大人に対する考えとなる子ども観を育てていたことが明らかとなった。学生が培った子ども観には、屈託がなく、健康状態に左右されない、そして発展途上にあることが明らかな幼稚園児という対象の特徴と、子どもと接する機会が少なく、子どもの言動を当たり前のことと捉えずに感動的に見れた学生の背景の影響が考えられる。また、実習を受ける学生がこれまでに学んできた人の機能と形態が成熟に至るまでの原則、児童憲章や子どもの権利条約の理念などが基盤となったといえる。しかしながら、これらの既存の学びと幼稚園実習における学びとの違いには、机上で学ぶことのできない実践的な子ども観の獲得がある。学生が子ども観を形成した手段を見ると、(1)子どもと子どもを取り巻く環境を観察する(2)学生自身が子どもとの関わりを深め、子どもの内面に触れる(3)先生の子どものための働きかけをモデルとする(4)先生から情報を得たり、助言を受けるに大別できる¹³⁾¹⁴⁾。成長発達を助ける看護は小児看護そのものである¹⁵⁾。改

めて、学生の子ども観形成に大きな役割を果たす実習施設の選択の重要性を認識する。

子ども観に繋がる遊びの理解は、入院中の子どもとの関連においても注目できる。学生の遊びに対する認識には、病気を持つ子どもにも通ずる本質的な理解が見えるからである。現在、「遊びの専門家」としての幼稚園教諭や保育士の病院内への導入状況は、2割程度であり、遊びに関わるのは主にナースである^{16) 17)}という。しかし、子どもに関わるナースの遊びに対する認識は、成長発達に欠かせないもの、不安の緩和であり、遊びを通して生き生きできることが病気の回復につながることで、遊びが成立するためにはナースとの信頼関係を形成することが重要との認識は十分でない¹⁸⁾。遊びの意味が学生に認知される教育の必要性を痛感する。Weller¹⁹⁾は、遊びを提供するという責任を認識していないならば、小児看護専門ナースとしての役割を実行できていないことは明らかで、疾患だけのケアになってしまうと指摘している。したがって、学生の幼稚園実習における遊びの理解をもとに、病棟実習においても遊びを提供することが必要である。同時に、幼稚園実習は子どものトータルケアに繋がる子ども観を培う機会として有効であることを確認した。

2) 観察やコミュニケーション技術の基盤となる見ること、聞くことの体験

学生が体験した子どもに学ぶことには、子ども独自の世界に寄り添い、子どもとの対話に繋がる工夫が詰まっている。学生は、幼稚園実習を通して「幼児と同じレベルまで下げるのかと思っていた」と単に視線を低くしたり、言葉遣いをやさしくするといったこれまでの視線を同じにするに対する認識の誤りに気付いている。小児看護では、子どもの思考の流れの中に立ち止まって子どもの言動を考え、表現することの理由やメッセージを受けとめて、日々の子どものかわりを考えていくことが必要である²⁰⁾。言葉で十分に訴えることができないために求められる小児看護特有の観察やコミュニケーションの技術である。学生は、子どもを通して、一人ひとりの世界観や価値観を認めること、そのらしさ・その人らしさに敬意を表すことを学び、視線を同じにすることの本来の意味に気付いたと推察する。反対に、病棟実習では、担当した子どもが学生と遊ぶことを楽しんでいたにも関わらず、「ずっと遊んでいただけでした」と子どもと自然な形で身近な存在となっている²¹⁾実状には気付かずに反省する学生もいる。提供者が人に何かをするためではなく、関係をもとうという意図をもってかかわるときに、コミュニケーションは癒しの効果を示すようになる²²⁾。【子どもの現実に身を置く言動や態度の習得】

の学習経験の根底にある受容的関わりは、健康な子どもに限らず、あらゆる発達段階の人に適用されることであり、看護にも置き換えられることである。子どもの特徴によって引き出された観察やコミュニケーション技術の基盤となる、その人を見ること、聞くことの体験を学生が意識できる学習支援のあり方の検討が課題である。学生の体験からは、基礎教育における幼稚園実習の役割の一旦を知ることができた。

研究の限界と今後の課題

本研究の学生の学習経験は、本学学生のG幼稚園における実習という限られた範囲におけるものである。学生の背景、実習施設の特徴、教育機関の方針等により、学習経験の様相は多様になることが考えられる。そのために、幼稚園実習における学習経験として偏りが生じた可能性は否めない。しかしながら、本研究を通して学生の学び、その中に見える子どもたちと先生方の姿から、一生活者としての視点や人としてのあたたかさが看護に求められていることの認識が明確となった。現在は、本研究を通じた学生からの学びを講義や実習の中で学生にフィードバックすることが可能となっている。共に学び合うという学生と教員との関係性の変容が、学生の学びを支えることに繋がることを期待している。さらに今後は、対象を拡大して調査に取り組み、一般化を図りたいと考える。

まとめ

1. 幼稚園実習における学生の学習経験は、【自分の力を生かしている子どものありようの理解】【子どもの現実に身を置く言動や態度の習得】の2つのカテゴリーから構成されていた。
2. 【自分の力を生かしている子どものありようの理解】【子どもの現実に身を置く言動や態度の習得】の2つのカテゴリー間には、相反する内容と共通する内容が存在していた。共通する内容としては遊びがあり、全体としては、相互に作用していた。
3. 幼稚園実習の意義として、子どもの主体性や生き生きしさに対応する大人の役割認識と遊びの認識、そして、子どもに学ぶ人との関わりの豊かさへの実感が示唆された。
4. 教育への示唆として、小児看護に重要な子どものトータルケアに繋がる実践的な子ども観の涵養、観察やコミュニケーション技術の基盤となる見ること、聞くことの体験という基礎教育における幼稚園実習の役割の一旦を知ることができた。

本論文の作成にあたり、ご指導賜りました広島女学院
ゲーンズ幼稚園長鈴木道子氏に深く感謝致します。

なお、本研究の一部は第18回広島県小児保健研究会お
よび第10回小児看護学会にて発表した。

文 献

1. 安田恵美子：文献からみる小児看護学実習の現状と今後の課題。筒井真優美（研究代表者）：看護系大学における小児看護学実習の実態と方向性。平成10年度～平成13年度科学研究費助成金研究成果報告書：16-28，2002
2. 飯村直子：看護系大学における小児看護学実習の概要。筒井真優美（研究代表者）：看護系大学における小児看護学実習の実態と方向性。平成10年度～平成13年度科学研究費助成金研究成果報告書：68-76，2002
3. 広島女学院ゲーンズ幼稚園入園案内
4. 川喜田二郎：発想法。p.4-32，中公新書，東京，1993
5. 舟島なをみ：質的研究への挑戦。p.24-31，p.84-97，医学書院，東京，1999
6. 川喜田二郎：KJ法。p.10-20，p.121-170，中央公論社，東京，1991
7. 前掲書3)
8. 倉橋惣三：育ての心（上）。p.27，フレーベル館，東京，1988
9. 小林芳郎：遊びをとおして知る子どもの心。小児看護，16（9）：1095-1099，1993
10. 暉峻淑子：豊かさとは何か。p.240-244，岩波新書，東京，2000
11. 園田悦代，市島昭子：看護学生の子ども観。京都府立医科大学医療短期大学部紀要，4：21-25，1994
12. 榎木野裕美，鈴木敦子，藤井真理子 他：本学学生の子どもへの接触体験と認識に関する横断的調査。大阪府立看護短期大学紀要，12（1）：51-61，1990
13. 永田真弓，宮里邦子，田中義人 他：小児看護学実習における学生の学習経験。幼稚園実習で捉えた子ども像。広島小児保健，13：32-35，2000
14. 宮里邦子，永田真弓，田中義人，他：小児看護学実習における学生の学習経験。幼稚園における子どもとの関わり。広島小児保健，13：36-39，2000
15. 川出富貴子：小児の成長発達をたずける看護。小児看護研究学会誌，1（1）：31-35，1992
16. 榎木野裕美：日本の遊びをめぐる環境の実態。小児看護，22（4）：445-449，1999
17. 中川 薫：病院における子ども支援プログラムに関する研究。山城雄一郎（主任研究者）：病院における子ども支援プログラムに関する研究。平成11年度厚生科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書：444-464，2000
18. 前掲書16)
19. Barbara F.Weller：看護婦と遊び。大阪府立看護短期大学発達研究グループ（訳）：病める子どもの遊びと看護。p.12-24，医学書院，東京，1988
20. 岡本幸江：手術を受ける子どもの姿。筒井真優美（編）：これからの小児看護。p.21-34，南江堂，東京，1998
21. 永田真弓，宮里邦子，エレーラ・ルルデス 他：小児科病棟実習における学生の学習経験の検討。広島大学保健学ジャーナル，1（1）：35-41，2001
22. Carol Leppanen Montgomery：ケアリングはケア提供者から始まる。ケア提供者の資質。神群博，濱畑章子訳：ケアリングの理論と実践。p.44-57，医学書院，東京，1995
23. Em Olivia Bevis，Jean Watson：安酸史子（監訳）：ケアリングカリキュラム。医学書院，東京，1999
24. 秋葉英則：小児期における遊びの意義。小児看護，22（4）：426-429，1999
25. 小嶋秀夫：児童発達観の研究。教育心理学年報，24：123-136，1984
26. 田原幸子，本間照子，広瀬たい子 他：子ども理解へのアプローチとしての保育園実習の評価。第21回日本看護学会抄録州集 - 看護教育 -，159-162，1990

Nursing students' learning experiences of pediatric nursing practice in kindergarten

- learning contents' trait and significance
of the context of fundamental education -

Mayumi Nagata¹⁾, Kuniko Miyazato¹⁾, Akiko Kawakami²⁾,
Kyoko Kajiwara²⁾ and Yoshito Tanaka¹⁾

1) Division of Nursing, Institute of Health Sciences, Faculty of Medicine, Hiroshima University

2) Health Sciences, Graduate School of Medical Sciences, Hiroshima University

Key words : 1 . students' view of children 2 . observation 3 . communication

This research was undertaken to investigate the learning experiences of students in the context of pediatric nursing practice. We conducted an analysis (using the KJ method) targeting 117 students who had pediatric nursing practice experience at H University, using two years of summarized conference notes as materials. This paper presents a report with a focus on learning experience in kindergarten.

1. Nursing students' learning experiences in kindergarten can be divided into two main categories: " Understanding of the nature of children expressing their strengths and abilities " and " Learning language and behavior from the perspective of a child's reality. "

2. A comparison of these two categories showed both contrasting elements and common elements. " Play " - which was one of the common elements - interacted with all of the other elements present.

3. This is an indication of the significance of pediatric nursing practice in kindergarten: during this research, we got a strong sense of an awareness of " play " and an awareness of the adult's role in response to the child's sense of identity and vitality.

4. In terms of the implications for education in general, we were able to grasp, to some extent, the role of training in kindergarten among the context of fundamental education - that is, the experience of watching and listening, which forms the foundation of observation and communication skills, as well as practical skills in cultivating the child's sense of self. All of these tie into the concept of " total care, " an important concept for nursing care of children and families in general.